《授業報告 特集「クロッシング科目」》

交差型非対面授業の試み

――「世界の言葉と文化を知る」の授業実践から――

金庚芬 藤原愛 鶴田涼子 鋳物美佳 中野隆基 廣瀬直記 細川尚子

1. はじめに

明星大学の2023年度より始まった新しいカリキュラムでは、「世界の言葉と文化を知る」を必修科目としている。本稿では、「世界の言葉と文化を知る」授業の概要を紹介した上で、授業に関する学生の意識調査の結果を報告し、今後の展開と課題を提案することを目的とする。

本授業は、明星大学の全学共通科目のコンセプトである「つなぐ学び」の視点を積極的に取り入れた語学教育の試みの一例として位置付けることができる。ここでいう「つなぐ学び」の視点を取り入れた語学教育とは、複数の言語の学習を通して、包括的・分野横断的・批判的視座を獲得するとともに、そのような視座そのものを学生・教員含めた学修者が「他者とともに学ぶ」ことで作り続けるような学びの過程を指す［中野 2022; 藤原 2017］。世界における様々な言語・ことばを学ぶことは、その言語・ことばが使用されている国や地域に対して学修者が抱くイメージの形成や変化に影響をもたらしうる［金 2017; 金ほか2020］。新入生全員が7言語の学修を通してその言語圏諸国・諸地域に触れる本必修科目は、質的にも量的にも、非常に画期的な試みであると言える。本稿は、この新しい語学教育の試みに関する第一報である。

2. 明星大学における全学共通教育及び「世界の言葉と文化を知る」

2.1. 明星大学の全学共通教育

現在、明星大学のカリキュラムでは、卒業単位132のうち、全学共通科目を32単位履修することになっている。そのうち、必修科目（履修単位）は、以下の通りである。

・学びとキャリア（2単位）
・世界の言葉と文化を知る（2単位）
・健康スポーツ科学論（2単位）
・データサイエンスリテラシー（2単位）
・外国語（4単位）

上記必修科目のほかに、次の7つの「科目群」から自由に選択履修することになっている。

・現代社会での自分の生き方を考える
・言葉で世界につながる
・多摩に学ぶ
・健康に生きる
・考えを広げる（知識を知恵に①）
・考えをクロスさせる（知識を知恵に②）
・考えを深める（知識を知恵に③）

旧カリキュラムでは、外国語を同一言語で8単位履修することになっていたが、新カリキュラムでは、4単位に変更し、新たに「世界の言葉と文化を知る」を必修科目とした。以下、その授業の概要、学修目標などを概観する。

2.2.「世界の言葉と文化を知る」の概要、シラバス

本科目は7名の担当者で、オンデマンド形式にて実施した。毎週、学生は動画を視聴し、その後小テストを受けるという方法である。動画視聴および小テストの実施期間として約1週間を設けた。学生からの質問受付には、明星 LMS の個別指導コレクションを利用した。また言語ごとに掲示板を作成し、交流する手段を用意した。

授業科目の概要および本授業の到達目標、授業計画、評価は以下の通りである。シラバスより引用する。

2.2.1. 授業科目の概要

グローバル化が進む現代において、世界の言語に触れ、それを身につけることがますます重要となってきている。この授業は、各言語を習得するに際して知っておきたい、その言語の特徴やその言語が使用されている国の文化について、各言語を専門とする教員7名が講義をおこなうクロッシング科目である。

多くの受講生にとって、初めて触れる言語もあるため、各言語が話されている国の文化や歴史を、図書館などで調べておくと授業が理解しやすい。授業後の復習としては、明星 LMS にアップされた資料をしっかりと見直しておくことをすすめる。また、授業で興味を抱いたことや、わからなかったことに関しては、図書館などを利用して調べ、理解を深めるとともに疑問を解消するようにしよう。

〈学生の行動目標・到達目標〉

1. 各言語の特徴を理解する。
2. 世界のことばと文化を知り、グローバルな視点を身につける。
3. 文化的多様性について学び、創造的な思考力や判断力を修得する。

2.2.2. 本授業の到達目標

全学共通教育科目では、「日本を含む世界の歴史や文化を学んでその差異の理由を理解し、多様

な文化を寛容に受け入れる姿勢を養うとともに、幅広い教養的知見を生かして問題を把握し、適切に判断する能力を身に付けさせる」を学修目標の一つにしている。本授業はこの学修目標達成の一環であり、国際化に対応する幅広い視野と多様性を受け入れ、創造的思考力及び判断力を修得することを目標としている。具体的には、世界のことば（韓国語、中国語、英語、ドイツ語、スペイン語、フランス語、日本語）とそれぞれの文化について学び、上記の目標を達成していく。

〈到達目標〉

1. 知識（国際化に対応する幅広い視野を獲得する、多様な文化に対する理解が深まる）
2. 理解、判断（多様性を受け入れる創造的な思考ができる）
3. 態度（多様な価値観を受け入れる姿勢が身につく）

なお、授業内容に関して、初回の授業では、受講に際してのルールを確認したのち、ことばの類型について学んだ。第2回目からの各回の授業内容については、4.1から4.7で記載する。

2.2.3. 授業計画

第1回	ガイダンス、本授業における受講ルール、ことばの類型
第2回	韓国、韓国人、韓国文化に触れてみよう。
第3回	韓国語とハングル文字を習ってみよう。
第4回	中国の言葉と文化①中国語の特徴／中国語のあいさつ／日中の漢字比較
第5回	中国の言葉と文化②民族と言語の多様性／貧富の差／中国の大学
第6回	「英語」の歴史について学ぼう。「なんとなく」覚えていた英語の規則や単語について深く知ろう。
第7回	「Englishes」について学ぼう。英語のバリエーションとその背景を知ろう。
第8回	ドイツ語圏の言葉と文化①ドイツ語圏の国と地域、暮らしと環境、食文化1、ドイツ語のあいさつ表現、数、ドイツ語を発音してみよう。
第9回	ドイツ語圏の言葉と文化②身のまわりのドイツ語、ドイツ生まれの商品、ドイツの学校、食文化2、森と環境、ドイツ語で童話を読んでみよう。
第10回	スペイン語圏の言葉と文化①スペイン語圏の国々・地域・人口／スペイン語の歴史と現在／数字・あいさつ・自己紹介／スペインの食文化／ラテンアメリカの食文化
第11回	スペイン語圏の言葉と文化②スペイン語の言語的特徴（アルファベット、発音、アクセント、名詞の性と数）／futbol（サッカー）のスペイン語／子守唄絵本「Duerme,duerme,negrito」(Rocio Martinez,Ediciones Ekare,2018) の文章を読んでみよう／スペイン語圏の建築物・音楽・踊り／「言葉」の拡張：「線」を描くという視点
第12回	フランス語圏の言葉と文化①フランス語圏の国・地域・歴史／フランス語の響きを知る／フランス語であいさつしてみる
第13回	フランス語圏の言葉と文化②フランス語の読み方・発音／フランス語のテキストの暗誦／フランスでの働き方、バカンスに対する考え方について理解する
第14回	日本における言語多様性と単一言語国家神話
第15回	母語としての日本語と外国語としての日本語

2.2.4. 授業形式及び評価

授業は、15週すべてを非対面（明星LMS、動画視聴＋LMS課題）で実施する。各回の詳しい授業案内は明星LMSに掲載され、受講生は「個別指導コレクション」を活用し、担当教員と連絡を取ることができる。

受講生は、毎回、動画を視聴した後（または、視聴しながら）、小テストに取り組むことになる。

成績評価は、動画視聴と、小テストの取り組み状況（課題提出状況）、小テストの点数により総合的に評価される。判定の種類は、合格（P）・否（H）で、評価の指標は、総合得点6割以上で合格（P）とする。

3. 授業に関するアンケート実施

3.1. アンケート調査の概要

2023年7月授業終了時に、大学が全学的に行う「授業改善のためのアンケート」とは別に、授業に関する学生の意識変化を探るためにアンケート調査を行った。調査期間は2023年7月24日（月）～8月6日（日）で、調査方法は、明星LMS「アンケート」機能を用いた。調査対象及び回答率は、履修者2286名のうち、1960名が回答し、86％という高い回答率を得ることができた。設問項目は、言語・文化の知識、学習意欲、自主的な学び、言語間の繋がりへの気づきなどについては5件法で尋ね、また、今後取り上げてほしい分野については自由記述式で回答してもらった。

以下、アンケートの項目ごとの集計結果を示す。

3.2 集計結果

Q1. 本授業で、初めて触れた言語はありましたか。

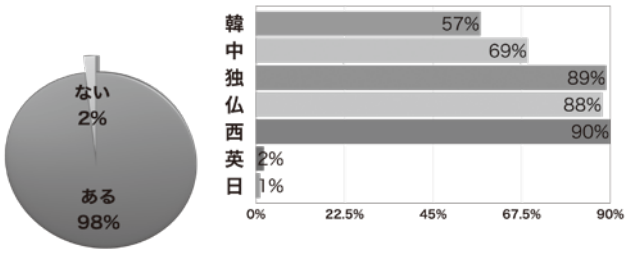

図1. 初めて触れた言語の有無及び言語別の結果

図1に示したように、初めて触れた言語が「ある」と回答したのは98％で、「ない」は2％である。とりわけ、ドイツ語やフランス語、スペイン語については9割ほどの学生が初めて触れており、中国語は7割ほど、韓国語は6割弱で、英語や日本語は結果から既習言語であることが分かる。

Q2. 学修により、履修している外国語の他に、勉強したいと思った言語はありますか。

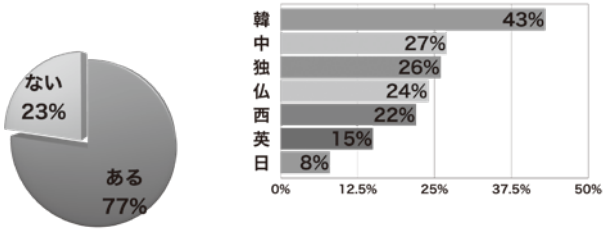

図 2. 勉強したいと思った言語の有無及び言語別の結果

図2から分かるように、 本授業での学びにより、現在履修している外国語の他に勉強したいと思った言語が「ある」と回答したのは77％で、「ない」は23％である。勉強したいと思った言語は、韓国語が43％でもっとも多く、中国語、ドイツ語、フランス語、スペイン語は27 ～ 22％で、英語が15％、日本語8％の順である。

Q3. 学修により、「ことば」や「言語」に興味を持つようになりましたか。

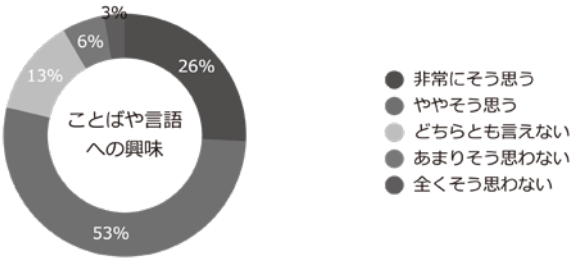

図 3.「ことば」や「言語」への興味

図3を見ると、本授業での学びによって、「ことば」や「言語」に興味を持つようになったと回答したのは「非常にそう思う」が26％、「ややそう思う」が53％で合わせると79％である。一方、「あまりそう思わない」と「全くそう思わない」は合わせて9％に過ぎない。

Q4. 学修により、各言語圏の「文化」に興味を持つようになりましたか。

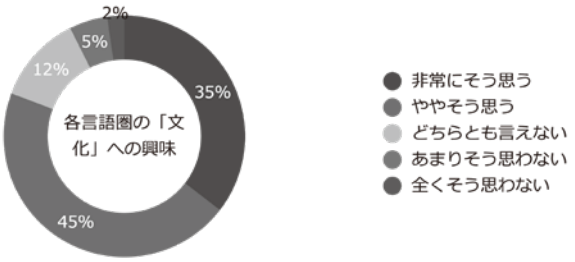

図 4. 各言語圏の「文化」への興味

図4に示したように、本授業での学びによって、各言語圏の「文化」に興味を持つようになったと回答したのは「非常にそう思う」が35%、「ややそう思う」が45%で合わせると80%である。一方、「あまりそう思わない」と「全くそう思わない」は合わせて7%に過ぎない。図3と図4の結果から分かるように、本授業での学修によって、多くの学生は、ことばや文化に新たに興味を持つようになったことが読み取れる。

Q5. 学修により、授業以外に自ら調べたいと思ったり、実際調べたことはありますか。

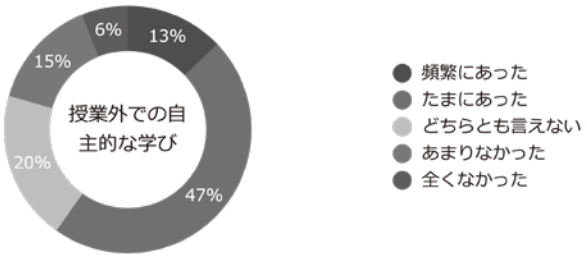

図 5. 授業外での自主的な学びの有無

図5が示すのは、学びの過程で、授業以外に自ら調べたいと思ったり、実際調べたことがあると回答したのは、「頻繁にあった」が13%、「たまにあった」が47%で、計60%である。「あまりなかった」と「全くなかった」は合わせて21%で、多くの学生が自主的な学びを実践できたことがうかがえる。

Q6. 学修により、7つの言語を比較する視点を持つようになりましたか。

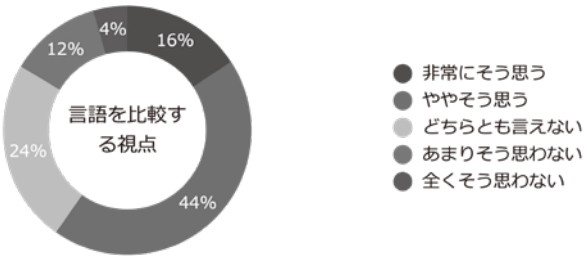

図 6. 言語を比較する視点の有無

図6から分かるように、本授業での学びによって、7つの言語を比較する視点を持つようになったと回答したのは「非常にそう思う」が16%、「ややそう思う」が44%で合わせると60%である。一方、「あまりそう思わない」と「全くそう思わない」は合わせて16%である。

Q7. 学修により、言語間で繋がっていることに気づいたと思いますか。

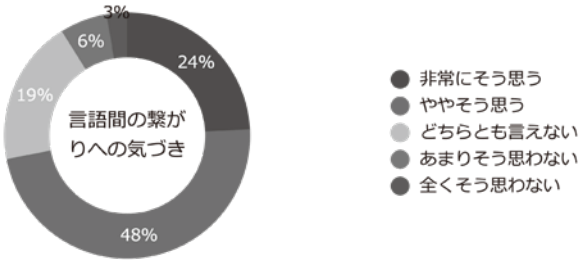

図 7. 言語間の繋がりへの気づき

図7に示したように、本授業での学びによって、言語間で繋がっていることに気づいたと思うと回答したのは「非常にそう思う」が24%、「ややそう思う」が48%で合わせると72%である。一方、「あまりそう思わない」と「全くそう思わない」は合わせても9%に過ぎない。

Q8. 言語と文化に関連して、この授業で取り上げてほしい分野

図8は、言語と文化に関連して、この授業で取り上げてほしい分野を、自由記入式で回答してもらったものをデータマイニングした結果である。スコアが高い単語を複数選び出し、その値に応じた大きさで示している。品詞別に、四角で囲われた語が名詞、点線で囲われた語が動詞、楕円で囲われた語が形容詞である。

頻度の高かった単語には、「言語、食文化、文化の違い、取り上げる」のほかに、「アラビア語、ポルトガル語、ロシア語、イタリア語」など、本授業で取り上げていない諸言語もある。また、「スポーツ、歴史、伝統、地域、音楽」など、言語や文化に関連する様々な分野も回答されており、今後の授業内容を充実させていくのに有益な意見が寄せられている。

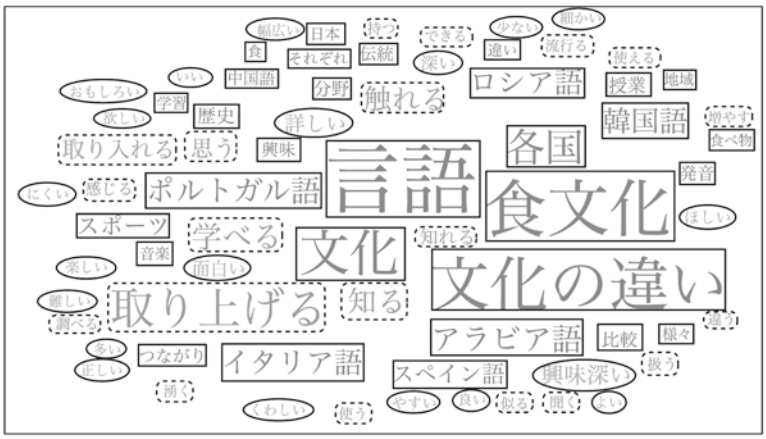

図 8. 言語と文化に関連して、この授業で取り上げてほしい分野

4. 担当教員の振り返り

4.1. 韓国語

韓国語回の第１回目は、「韓国・韓国人・韓国文化」について、受講生の韓国に対するイメージを確認してから、朝鮮半島、韓国の地理、歴史、教育制度、祝日、韓国人の名前、生活、食事マナー、学事日程を取り上げた。また、あいさつ、数字、人間関係によることば使いについて日本語と比較しながら紹介した。随所に、簡単な韓国語の「応答詞、出会い・別れのあいさつ、感謝、旅行関連」の表現を取り上げ、声を出して練習する時間を設けていた。第2回目は「韓国語、ハングル文字」について取り上げた。最初に、平昌オリンピックでの小平奈緒選手と李相花選手の友情とことば使いを紹介した後、韓国語の概要（表記、文の構造、語彙、敬語）を説明した。また、韓国語の文字であるハングルについて、創製の背景、基本原理、子音字母・母音字母の創り方、一文字の構造を紹介した。さらに、単母音の文字と発音を練習し、子音字母と組み合わせることで、各自、大学名や氏名をハングルで書くことができた。最後は、初対面での自己紹介を韓国語でする練習も行うことができた。

各回授業の最後に行った小テストは、授業の動画を真面目に視聴すれば解ける問題にし、一部は授業内容に基づいて応用すれば解答できるように作成した。

韓国語回は、授業で最初に取り上げる言語であったことや、最近の韓国・韓国語ブームの影響もあり、受講生は非常に真面目に、また興味を持って授業に取り組んでいた。今年度の初習韓国語（1A/B, 2A/B）を履修している学生は、延べ1109名で、ほとんどのクラスがクラス上限30名に達している。その履修者の他にも、この授業で韓国語に触れることによって、今後韓国語を学んでみたいと回答した学生が非常に多いことが分かり（3.2. 集計結果 Q2）、そのニーズや高い関心に対応できる教育活動を今後の課題としたい。

4.2. 中国語

中国語回では、第1回目に「簡体字、ピンイン、声調、文構造、あいさつ、日中の漢字比較、数字の読み方」、第2回目に「民族と言語の多様性、貧富の差、料理の違い、レストランで使う中国語、中国の大学、高考（＝大学入試）、大学生活」などの内容を取り上げた。

第1回目は中国語の特徴をごく簡単に紹介することにつとめたが、中国語と日本語の共通点である漢字についてはやや掘り下げて説明した。また、それに関連して簡体字と繁体字（※台湾、香港の漢字）の違いやその歴史的背景にもふれた。数字については、各言語で必ず取り上げるように事前に決まっていたのだが、日中の漢字の読み方を比較するうえでたいへん役に立った。

第2回目は「中国の地域差」をテーマにして、中国という一つの国に関する全体的な紹介はあえて省略した。というのは、「ドイツはこうだ！　フランスはこうだ！　中国はこうだ！」という単純な色塗りをしてほしくなかったからである。料理や大学（とくに高考）も、そのような観点から取り上げたつもりだが、そのぶんすっきり整理できない話になってしまったかもしれない。

この授業の基本的な狙いは、外国語や外国文化に対する学生の興味関心を喚起することだと思っ

ているので、来年度以降の展望としては、中国の世界遺産やポップカルチャーを紹介するなど、もう少しキャッチーなテーマを増やしてみることも検討したい。

なお、中国語回では、学生の動画視聴耐久時間がそれほど長くないであろうことを考慮して（※昨年度は平均視聴時間約8分）、各回10分ほどの動画を4、5本 YouTube にアップロードし字幕も付けた。また、小テストは各回20問、計40問100点満点とし、すべて動画のなかに埋め込んだ。これによって、動画を視聴しなければ、小テストの出題内容がわからないようにした。

4.3. 英語

大学入学までにいわゆる「英語疲れ（英語学習に興味をなくしたり、ストレスを感じたり、意味を見出せなくなったりする状態）」に陥っている学生も少なくないため、この「世界の言葉と文化を知る」において既習言語としての「英語」を取り扱ううえで、どのようなテーマ・コンテンツが学生にとって魅力であろうか、非常に悩んだ。結果として、第1回目では、一方言であった英語が、どのように現在の国際共通語としての地位に辿り着いたのか、その決して平坦ではない道のりを歴史を紹介し、いくつかの言語現象について言語学的な視点から解説を行なった。具体的には、現代英語の綴りと発音の不一致の原因の一つである「大母音推移」や、不定冠詞（an, a）の言語学の視点からの説明および不定冠詞を伴う異分析により形態変化した語の紹介、日本語と英語における「名前」や「住所」の表記順の違いがなぜ生じるかについての考察など、今まで学生が疑問を持たず「当たり前」または「覚えるより他にない」と思っていた言語現象を「学問」として捉え直すという視点を提供した。

「当たり前」だったことを「学問」とし研究する姿勢、これは英語をはじめとする外国語授業に限ったことではなく、どのような科目であれ、どのような専攻であれ、授業に臨む際には大学生として持っているべき視点である。日本の教育では、「英語」という言語は学ぶのが当たり前となってしまっており、学修者自らが「なぜ学ぶのか」、「何のために学ぶのか」を考える前に、既に「学習」と「競争」が始まっている不幸な科目である。本学の学生にとってはこのような教育制度の中、積極的に取り組んできたというよりは、「やらされてきた」という感覚が強いであろう英語について、この授業を機に、身近な経験をテーマにとりあげることで「違い」や「難しい」を「面白い」や「奥深い」に変えてほしいと思い取り扱った。

第2回目では英語の多様性についての解説を行なった。英語という言語は世界共通語ではあるものの、英語文化圏の広さ・多様さゆえに、「英語文化圏の文化や習慣を紹介する」というのは到底無理である（もちろん日本語を含め他の言語でも、一元化した文化紹介は無理といより「無意味」である）。英語を第一言語とする国・地域、英語を第二言語とする国・地域、英語を公用語とする国・地域を紹介し、そのうえで第1回目の歴史的背景を踏まえて「なぜ」その地域で英語が使用されているのかを考えてもらった。さらに社会言語学的な立場から英語の方言差について知ることで、発音・語彙・文法のどれをとっても、今や英語には学修者が目指すべき「唯一無二のモデル」は存在しないことを理解させ、English as a Lingua Franca（EFL）の考えを紹介し、英語を母語としない学修者同士のコミュニケーションに必要な英語（能力）について考えてもらった。

この2回の英語回の授業で取り扱ったテーマやコンテンツが適当であったかどうかは、今後検討

の余地があると考えるが、英語においては一番初めに述べたように、「英語疲れ」の学生をどうにか救いたいという私の思いが根底にあったことを再度述べておく。

4.4. ドイツ語

ドイツ語回の第1回目は、ドイツ語圏の国と地域、ドイツの祝祭、年中行事、身の回りにあるドイツ由来のもの、歴史、暮らしと環境、朝の食文化、発音練習、自己紹介の仕方等について扱った。第2回目は、ドイツ語圏の食文化、歴史的建造物、学校制度、移民の受け入れ、余暇の過ごし方、音楽、ドイツ語からの借用語、民話等を扱い、実際にドイツ語を読む機会を用意した。テーマの選定に際しては、ドイツ語の履修生に意見聴取をおこない、学生の見解を参考にした。例えば、ドイツの州の旗や音楽については学生の意見を反映させて取り扱うこととした。また本授業のドイツ語回の1回目で、小テストに加えて選択式アンケートへの協力を依頼し、希望が多数となったテーマを第2回で追加した。

大学入学時において、ドイツに関しては世界史の授業で学んできたドイツ関連のキーワードの他には、あまり知る機会がなかったという学生も少なくない。本科目では、ドイツ語圏の多様な面を可能な範囲で幅広く、フラットに伝えるようにつとめた。またドイツ語圏における学校制度や日々の暮らしを紹介することで、ドイツ語圏の国々とそこに暮らす人々を身近に感じてもらいたいと考えた。それだけでなく、生活から見えてくる考え方を理解し、多様な価値観を知ってもらいたいという目的があった。

2023年現在、駅や公共交通機関、文化施設等においてドイツ語を耳にすることがある。日本で生活するなかで、複数の言語を聞き、多様な文化圏の人々と接する機会は今後さらに増えるであろう。7つの言語文化について半期で学び、親しむことによって、言語を学ぶのみでなく、多様な文化圏に生活する人々の考えを受け入れる素養を身につけてほしいと思う。

本科目を履修したことによる成果は今後様々な形であらわれてくると考えるが、現時点で気づいた点について報告したい。全学共通教育委員会外国語部会では、各言語において正課外で会話講座や発音講座などを開講している。例えばドイツ語科会が実施している自由会話講座では、2022年度は21名の登録者があった。2023年度前期には、当講座への登録者数が26名となり、増加傾向にある。また「世界の言葉と文化を知る」を履修したことをきっかけに2023年度の後期からドイツ語の学習を開始した学生もいる。これらは、必修科目化の影響の例と捉えてよいであろう。しかしこうした影響関係のほかに、すぐには把握できないような、見えてこない変化や成長もある。こうした部分こそが大切であって、それは学修者一人ひとりのこれからの活動と結びついていくと考える。

ある時ひとりの学生が、知人のドイツ語話者とドイツ語を用いて交流することができたことを報告してくれた。こうした体験の瞬間が新しい世界をひらく糸口になるかもしれない。本科目が、「わかった、できた、通じた」といった体験や、「楽しい、気になる、知りたい、面白い、なぜだろう」といったような、興味の連鎖を生み出す出発点となることを願う。学生の理解と協力を得て、2200名以上が履修する科目を開講できたことに感謝するとともに、アンケートや学生からの直接の声を通して学んだことを活かし、本科目をブラッシュアップしていきたい。

4.5. スペイン語

第1回目は、スペイン語圏の概要（国々・地域・人口・歴史・現在）とスペイン語の数字・あいさつ・自己紹介についてごく簡単に解説したうえで、スペインの食文化とラテンアメリカの食文化の地域的特徴とその多様性について、写真等も取り入れ、可能な限り詳細かつ具体的に提示することを試みた。第2回目では、スペイン語の言語的特徴（アルファベット、発音、アクセント、名詞の性と数）を導入し、サッカーや野球をスペインとラテンアメリカ双方に（そしてアメリカ合衆国にまで）なるべく関わるかたちで主題化して提示・紹介した。さらに、子守唄絵本とその子守唄の歌詞を比較し、歴史的・政治的・地域的文脈が異なれば、記号の持つメッセージが翻訳を通して変化することを示した。そして、スペインの建築物であり観光名所でもあるサグラダ・ファミリア大聖堂を取り上げ、その建設過程をキリスト教的概念・物語が石膏模型や聖堂へと、そしてそれらを聖堂全体の楽器へと、記号間翻訳が行われる過程として提示した。

「つなぐ学び」としての語学教育を実践するため、これらの講義で細心の注意を払ったのは、言及する対象をなるべく単一かつ固定的なステレオタイプとして提示しない、ということである。もちろん、講義は2回という限られた時間であり、ステレオタイプを全く学修者に喚起させない授業などは至極困難を極めることに疑いはない。ここで言いたいのは、授業を通して提示ないし喚起される「言語」「文化」が常に多様であり別様のものであり得る、という理解や構えを、授業に参与する教員や学生をはじめ学修者が共有しようとすることの重要性である。このような意図をもった本授業は、後の考察部で触れるように、成果と課題を同時に表出させるものであった。今後は、他言語担当教員が挙げている技術的・方法論的課題と含め、よい「つなぐ学び」をいかに実践するか、検討していく必要があるだろう。

4.6. フランス語

フランス語回では、第1回に「フランス語圏の国・地域」「フランス語の響き」「あいさつ」「数字」を、第2回には「暗唱」「自己紹介」「文化政策とバカンス制度」を取り上げた。

この構成にはいくつかの目的がある。まず、なんとなくおしゃれというイメージを超えて、フランス語をより実用的なものとして理解してもらい、学習するメリットに思いを馳せてもらうこと（「フランス語圏の国・地域」）。次に、フランス語という言語において何が大切にされているかを、発音に焦点をあてて紹介し、体験してもらうこと（「フランス語の響き」、「暗唱」）「暗唱」ではブレーズ・パスカルの「考える葦」の一節を、フランス語の響きを味わいながら口に出す練習を用意した。また同じ作業を文化についても行うために、人間の社会生活においてどのようなことが制度上大切に考えられているかをフランスを事例に紹介した（「文化政策とバカンス制度」）。日本文化を相対視する視点を持ってほしいとの思惑もある。そしてもちろん、実践への橋渡しをすることにも気をつけた（「あいさつ」と「自己紹介」）。

毎回の小テストでは、動画を踏まえて自ら調べて回答する設問を設けた。学修は授業の外まで繋がっていることを意識してもらうためであったが、この点については、学生によっては動画の中にのみ答えを探そうとして苦心した者もいた。動画視聴で学生が受け身に慣れすぎてしまったのかも

しれないが、せっかくのオンライン授業であるので、様々なツールを学修のために使いこなす態度を持つよう、より意識的に注意喚起していきたい。

また暗唱は語学学習のために効果的であるし、響きはフランス語の重要な要素であると考えるが、動画では個人個人の発音をチェックすることができない。なるべく小テストで補うようにしたが、動画配信型の授業で発音を紹介することの妥当性および具体的解決策については今後の課題としたい。

4.7. 日本語

一連の言語について学んだのち、最終週2回は日本語をテーマとした授業を行った。履修生の大半が日本語の母国語話者であるため、普段言語として意識する機会の少ない日本語について、客観的に、諸外国の言語との比較的視点から考える機会となる授業を目指した。第1回目の授業では日本における言語多様性と単一言語国家神話をテーマとした。日本は「単一言語国家」と表現されることがある。しかし、ユネスコによれば日本にも、アイヌ語、八丈語などを含めた9つの言語が存在しているという。また、日本に住む外国人の話す言語も、日本社会の中に存在する言語と考えられる。そして、数多くの方言や手話など、様々な言語の形が日本にも存在する。この事実をもとに、いかに日本にとっても言語の多様性が重要なテーマであるかに焦点を当てた。そして、その言語の多様性を通して、社会の多様性や平等性についても考えられるような構成にした。第2回目の授業では母語としての日本語と外国語としての日本語をテーマとした。世界における日本語の話者や学習者の数、非母語話者が日本語を難しいと感じる点などについてデータや実際のエピソードをもとに話した。日本で暮らしていると、日本語を外国語として捉える考え方はあまり見られない。しかし、日本語も他の言語同様、外国語として学習している人がいること、学生たちが外国語を勉強していて壁に突き当たるのと同じように日本語を学習していて間違えたり、難しさを感じたりしながら頑張っている人もいると知ることで、自身の外国語学習の励みにしてほしいという思いもあった。授業後に、日本語について改めて考える機会ができてよかったという履修生からの感想もあり、意義のある授業になったと思われる。

5. 考察

上記の授業後のアンケート結果を基に、学修の成果や授業運営について考察したい。

学修の成果としては、まず多くの学生が「外国語＝英語」の意識から、英語以外の言語に興味を持つようになったことである［藤原 2017］。また、ことばや言語のほかに、それぞれの文化への興味も高く、とりわけ、食文化への興味や要望が多く見られた。これは、次年度以降の授業内容として検討していきたい。さらに、自ら学修を深めることや、複数の言語を比較する視点、7つの言語以外の言語に対する興味を持つようになったという意識の変化にも注目したい。今回は、大まかな傾向を見ることに留まっているが、具体的にどのような変化があったか、掘り下げた内容で調査することを今後の課題としたい。

以上の論点に加えて重要なのは、複数の「言語」「ことば」「文化」を比較するとはいかなることか、「文化」的・「言語」的多様性を学ぶとはいかなることか、といった前提について、自明視・絶対視することなく、理論的・実践的に検討し続けることである。以下では、最後の論点に関連して、①本授業の比較の様式について、②文化的多様性について、③言語的多様性について、の３点について若干の考察を加えたい。

第一に、「世界の言葉と文化を知る」という本授業の比較の様式についてである。しばしば、「言語」や「文化」の「比較」ということになると、その単位は国民国家と同一視されることがある。たとえば、国内の大学における「スペイン語」「スペイン語圏」関連の授業では、たとえラテンアメリカ含め世界のあらゆる「スペイン語」圏の国・地域についての授業が行われたとしても、全て単一の「スペイン」国内の話のみが扱われているかのように理解する学生が散見される［飯島 2010］。本授業後の全体アンケートの結果では、一見、このような記述はさほど目立たない。しかしながら、「文化」や「言語」の共通の比較の枠組みを授業設計に提案する学生回答では、「各国の」「それぞれの国の」「その国々の」あるいは「日本と外国の」といった表現が散見され、「文化」を比較する枠組みが、「日本」をはじめとする国民国家とそれに（一対一対応する）「言語」「文化」という構図の自明視から成立していることが窺える。

このような本質主義的な「言語」「文化」「国民国家」の「類像化」は［Gal and Irvine 1995: 967-970、Irvine and Gal 2000、Cf. 中野 2016: 28-29］、興味深いことに、「国籍や民族などの異なる人々が、互いの文化的ちがいを認め合い、対等な関係を築こうとしながら、地域社会の構成員として共に生きていくこと」を目指す国内の「多文化共生」という言説や［総務省2006］、文部科学省の学習指導要領解説に明記された「グローバル化が進展する中」「多様な外国語」の「背景にある文化を理解する」という前提と共鳴する［文部科学省 2017: 14-15］。多文化共生と学習指導要領解説の言説に共通して指摘できるのは、急速な「グローバル化」を背景とした社会的要請が「ある」という前提だが、「言語」「文化」「国民国家」の本質主義的な類像化に関しては、学生の提案する比較の様式を含め、みな同じ前提を有するといえる。

当然ながら、「国民国家」の「言語」「文化」という比較の様式の絶対視や本質化は、数多ある「言語」や「文化」に関する比較の様式の一形態に過ぎず、学修者の観点の拡張を常に要請する「つなぐ学び」としての語学教育とは方向性を異にする。ゆえに、本授業の今後の課題は、世界の「言語」と「文化」を比較する様式そのものを比較し、関連づける方法と、その提示（表象）方法について、授業内外において学修者が批判的に検討する機会を設けることだろう。たとえば、言語と文化・社会の関係について民族誌的に調査・研究を行ってきた文化・言語人類学や、社会・文化と言語の結びつきについて調査・研究を行ってきた社会言語学等の分野の成果の簡単な紹介などは、発見法的な比較の枠組みとして重要な論点を提示すると思われる。

第二に、本授業が学生に喚起した文化的多様性について述べたい。「文化」的要素として授業内で取り上げることを学生が希望するテーマは、本稿でもすでに述べられたが、非常に多岐にわたる。限られた例を挙げてみても、小説や文学、アニメや漫画、日常生活、おもちゃ、音楽、観光地、文化史、祭り、気候や衣類、昔話や神話など、「文化」という概念が喚起するテーマはその多様性と広がりという側面において豊富である。本授業は「つなぐ学び」としての語学教育の実践の一例であり、常に「言語」ないし「ことば」と「文化」との関係に立ち返ることを要請する。しかしこの授業は同

時に、「言語」「ことば」の概念や射程そのものを拡張し、理工系や人文社会系含め9学部・12学科の新入生全員を必修科目によってつなげ、教員含めそれぞれの学修者の観点を拡張する機会の提供にもつながりうる。今後は、担当教員の専門分野や時間的制限など、さまざまな制約があるものの、可能な限りこれらのテーマを取り上げ、限られた時間でいかに幅広い「文化」的テーマを「言語」「ことば」と関連付け、提示するかの議論が必要である。

第三に、言語的多様性について触れたい。本授業を新入生必修科目として実施した際の一番の驚きは、授業中に提示した7言語に限らず、それ以外の数多の「言語」や「文化」への興味・関心を喚起したことであった。たとえば、「スペイン語」を勉強したいと回答した学生が、次年度以降に取り上げることを提案した言語に限っても、ポルトガル語、イタリア語、ロシア語、タガログ語、タイ語、アラビア語、スウェーデン語、少数言語など、様々な言語やその言語圏の文化を取り上げることが受講生から提案された。さらに、「普段使っている日本語をもっとまなんで知らなかったことに気づけるようになりたい」(回答ママ) との回答も見られた。これらの回答は、「無知と知の間にこそ豊かな学びがある」ことを前提に、「知らないことを知り、人を豊かにする」という全学共通科目のコンセプト「つなぐ学び」のプロセスが具現化されたものだといえよう [明星大学全学共通教育委員会 https://zengaku.meisei-u.ac.jp/tsunagu/ (2023年11月7日 13:07アクセス)]。それは同時に、文化人類学者の松村圭一郎 [2019、2020] が「曲線的な生き方」と呼んだ学びの姿勢、すなわち、学ぶごとに新しいことが見え、当初のアプローチや目標すら変わる、つまり学びの醍醐味が知識の習熟度によって増してくる、ゆえに長期的にしか分からない学びの良さを実感できる学びの姿勢を、受講生が部分的にではあれ修得した証左といえる。これは本授業で最も大きい成果の一つと言って差し支えないだろう。

今後は、以上述べた3点について、さらなる理論的検討と実践が必要と思われる。特に、国内の言語教育において準拠されることが多い複言語主義的な「ヨーロッパ共通参照枠」(欧州評議会言語政策局 2016) との比較を通して、「つなぐ学び」としての語学教育の可能性を検討することは、重要な課題の一つである。

次に、授業運営において、非対面授業の利点を活かした授業運営ができたと評価できる。具体的には、授業開始までに担当教員らの綿密な準備や情報共有、初回のオリエンテーションでしっかりと授業への取り組み方を理解させたこと、毎回の明星 LMS での発信、随時学生からの質問や問い合わせに対応することで、2200名以上の大規模授業の運営が円滑に行われたと評価できる。また、成績評価の指標は、毎回の授業動画の視聴と、15回の小テストの総合得点で、6割以上の得点で合格とした。84.6%の履修者が合格となり、15.4%が不合格、うち5.4% が総合得点6割未満、10.0%が課題提出不足であった。なお、アンケートの自由記入の中には、言語ごとの小テストの難易度に差があることを改善してほしいという意見があったので、今後の課題として検討したい。

6. 終わりに

本稿では、新カリキュラムの必修科目「世界の言葉と文化を知る」を紹介した上で、2023年7月に実施した授業に関するアンケート結果をもとに、授業実践及び学生の意識変化について報告した。

全学共通教育の語学担当教員が、言語を超えて学生に学びを提供する試みを始めたのは2019年度に遡る。この年度にスタートした3つのこととして、①選択科目としてスタートした「世界のことばと文化を知る」、②学習言語に関わらず、各外国語の教員が全員で授業を行い、渡航先での語学学習をサポートする「海外語学研修 A/B」、そして③「明星大学2019年度 重点支援研究費」に採択された『インタラクティブプロジェクタを活用したアクティブ・ラーニング型外国語学習の効果』である。③の重点支援研究については、翌年の2020年度そして2021年度が新型コロナウイルスの感染拡大の影響でオンライン授業となったため、当初計画していた対面授業による学習効果の検証を行うことができなかったが、結果としてコロナ禍での LMS や Zoom を用いた授業、そして教員のオンデマンド型のビデオ教材作成が容易となったことで、当初のインタラクティブプロジェクタによる授業効果を超えた、大規模かつ統合的な授業である今回の「世界の言葉と文化を知る」の必修科目としての授業実施が可能となったと考えていることから、本稿の重点支援研究の成果としての意義をここに付しておく。

次年度以降は、今回の授業実践の成果を活かし、また学生の意見及び教員らの振り返りを反映した授業作りを検討していく。「世界の言葉と文化を知る」での学びを通して、一人一人が複数の言語や文化に触れ、興味と視野を広げることで、言語に対する寛容性を養い、その多様性を容認する考え方を身につけることを願いたい。

参考文献

飯島みどり（2010）.「授業探訪『スペイン語圏の文化』：誤解と現実は紙一重」,『大学教育研究フォーラム』15: 70-73.

欧州評議会言語政策局（著）, 山本冴里（訳）（2016）.『言語の多様性から複言語教育へ－ヨーロッパ言語教育政策策定ガイド－』. くろしお出版 .

奥村三菜子（2023）.「日本語教育と複言語教育の接続－日本語教育にもたらす課題とインパクト－」, 西山教行・大山万容（編）『複言語教育の探究と実践』pp. 39-57. くろしお出版 .・奥村三菜子・櫻井直子・鈴木裕子（2016）.『日本語教師のための CEFR』. くろしお出版 .

金庚芬（2017）.「日本の大学生の韓国 , 韓国人 , 韓国語に対する好感度 : 韓国語学習者・非学習者別に」,『明星大学研究紀要：人文学部』53: 17-26.

金庚芬・崔宰栄・関崎博紀・姜錫祐・梁吉錫・國生和美・金志姫（2020）.「日本と韓国の相手国への好感度を形成する要因 —高校生・大学生・一般人の世代別比較—」『行動計量学』47-1:13-25.

中野隆基（2016）.「制度的場をめぐる多言語社会研究に向けて《特集：メタ・コミュニケーション》」,『社会言語科学』19（1）: 21-37.

中野隆基（2022）.「第二外国語としてのスペイン語教育に関する理論的基盤の検討：異文化理解に向けた包括的・分野横断的な語学教育の体制構築と実践に向けて」,『明星大学全学共通教育研究紀要』4: 15-27.

西山教行・大木充（2016）.『CEFR の理念と現実理念編言語政策からの考察』. くろしお出版 .

西山教行・大山万容（2023）.『複言語教育の探究と実践』. くろしお出版 .

新多了（2021）「グローバル社会を生き抜く力としての「複言語能力」—英語教育の視点から」,『外国語教育研究ジャーナル』2: 236 – 242.

藤原愛（2017）「外国語教育の展望」,『明星大学研究紀要人文学部』53: 95-106.

松村圭一郎（2019）『これからの大学』. 春秋社 .

松村圭一郎（2020）『はみだしの人類学 : ともに生きる方法』、NHK 出版 .

文部科学省（2017）.『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説』. 文部科学省 .

Gal, Susan, & Irvine, Judith (1995). The boundaries of languages and disciplines: How ideologies construct

difference. *Social Research*, 62(4), 967-1001.

Irvine, Judith, & Gal, Susan (2000). Language ideology and linguistic differentiation. In Kroskrity, Paul (Ed.), *Regimes of language: Ideologies, polities, and identities*, pp. 35-83. Santa Fe, New Mexico: School of American Research Press.